資料館ノート　第 118 号　　平成 28 年11 月 16 日発行

歌舞伎と深川④

深川ゆかりの役者たち

江東区深川江戸資料館

数々の歌舞伎の舞台となった深川は狂言に描かれた地のみならず、歌舞伎の華である役者たちが暮らし、また眠る墓が数多くあります。前号で紹介した江戸歌舞伎を代表する四代・七代目市川團十郎をはじめ、歴史に名を刻む業績を果たした役者たちが深川にその足跡を残しました。

今回は深川ゆかりの主な役者たちを紹介します。

1. 市川團十郎の弟子たち

(1) 初代市川團四郎

初代團四郎（慶安 4 年〈1651〉～享保 2 年〈1717〉）は江戸歌舞伎を創始し、「役者の氏神」と言われた初代團十郎の弟子です。市川助六から貞享 4 年（1687）團四郎と改めて荒事の「荒獅子男之助（あらじしおとこのすけ）」を演じました。また実事（じつごと）や所作事（しょさごと）（歌舞伎舞踊）の名人とも言われました。その後、仏門に入りましたが、森田座の依頼で舞台に復帰後、深川の草庵に住みました。初代團四郎の墓は正源寺（永代 1-8-8）にあります。

(2) 初代市川八百蔵

初代八百蔵（享保 5 年〈1730〉～宝暦 9 年〈1759〉）は、大坂の道化方である松島茂平次の子として生まれました。寛保 2 年（1742）父と共に江戸に下り、子役の名人と言われました。寛延 2 年（1749）二代目團十郎の弟子になり、市川家の家の芸である荒事を得意としました。商いにも長け、万町で油屋、堺町で「八百蔵おこし」を販売したといいます。初代八百蔵は法乗院ゑんま堂（深川 2-16-3）に眠ります。

2. 座頭の風格　中村歌右衛門

(1) 初代歌右衛門

初代歌右衛門（正徳 4 年〈1714〉～寛政 3 年〈1791〉）は、金沢の医師の子として生まれました。幼少の頃から芝居が好きで 17 歳で役者の道に入り、その後 12 年に亘り全国の芝居小屋を回りました。寛保 2 年（1742）京ではじめて大芝居の舞台を踏み、歌右衛門と改名します。

初代歌右衛門は江戸に下り、四代目團十郎と組み宝暦 9 年（1759）正月市村座の「初買和田宴（はつがいわだのさかもり）」は大評判を呼びました。初代は特に実悪（じつあく）で評判を得、特に内面から役柄を深く理解し、見た目でなく感情を込めた演技を大切にしました。妙見信仰に厚かった初代は浄心寺（平野 2-4-25）に妙見菩薩と石灯籠（現存）を奉納しました。二代目、三代目歌右衛門はじめ、代々の歌右衛門も浄心寺を信仰しました。

初代市川團四郎の墓（正源寺）
※右の地蔵像は現在修理中

「花江都歌舞妓年代記」（部分）
立川焉馬著・勝川春亭画
文化 8 年（1811）国立国会図書館蔵

(2) 四代目歌右衛門

四代目歌右衛門（寛政 10 年〈1798〉～嘉永 5 年〈1852〉）は江戸の生まれです。母の姉が振付師・藤間勘十郎の妻だった関係で養子に入り、踊りの修業に入ります。その後、江戸に下った三代目歌右衛門に弟子入りし、立役、実悪、女形、武道、荒事など幅広い芸をこなし、特に所作事を得意としました。

文政 8 年（1825）に師である三代目の俳号である二代目芝翫（しかん）を襲名します。天保の頃（1830 ～ 1843）その住まいは小名木川沿いにかつてあり、「芝翫河

「花翫暦色所八景」（都立中央図書館特別文庫室蔵）
「東八景ノ内花二雲　深川朧月」を踊る四代目歌右衛門

岸」と呼ばれました。天保２年（1831）に江戸中村座の「六歌仙」を演じ、喜撰法師の歌詞をひねり、「我が庵は芝居の辰巳常盤町、而も浮世の放れ里」と舞台で深川の自宅の様子を取り上げました。

その後、天保７年（1836）四代目歌右衛門を襲名。それまでの歌右衛門の屋号は初代の出身地から「加賀屋」でしたが、四代目から「成駒屋」に改めました。それは初代が四代目團十郎（成田屋）から義兄弟の契りを結んだ証として将棋の駒模様の衣装を贈られたことからと言われます。

また四代目は師である三代目の三回忌供養として、浄心寺に「梅玉の碑」を奉納しました。

芝翫河岸（常盤 2-15）

3. 女形の座頭　五代目岩井半四郎

五代目半四郎（安永５年〈1776〉～弘化４年〈1847〉）は、江戸歌舞伎の爛熟期である文化文政期（1804 ～ 1830）を代表する女形です。目に愛嬌があり、「目千両」と呼ばれました。

四世鶴屋南北は五代目半四郎のために「於染久松色読販」で七変化、「桜姫東文章」の風鈴お姫などの悪婆物をはじめ、女形主役の狂言を多く書き、半四郎は新しい女形芸を確立しました。

またそれまでの歌舞伎は立役（男役）が主でしたが、五代目半四郎は座頭となり、女形の地位向上にも大きな業績を残しました。浄心寺には三代目から八代目までの半四郎の墓がありましたが、近年移転しました。

4. 座元から僧侶へ　四代目市村竹之丞

自性院（亀戸 6-35-23）は四代目竹之丞が中興の祖となった寺です。四代目竹之丞は江戸三座の市村座の座元として、また役者として活躍しました。

伝統と格式を誇った中村座に対して、市村座は新しい挑戦をしたことが特色です。大がかりな道具、続狂言、舞台前に安価な客席を作る（切落）、また歌舞伎に欠かせない引幕などは市村座からはじまったといわれます。

四代目竹之丞は美貌で名高く、それまでの踊り中心であった若衆方の芸に、はじめて長いせりふを取り入れました。若い頃より信仰の深い四代目竹之丞は延宝７年（1679）27 歳の若さで仏門に入り、自性院で得度し、誠阿と名を改めました。その後、自性院の師の没後に住職となりました。自性院には初代から十二代目竹之丞の墓があります。

このようにこの地に住み、また眠る役者たちのゆかりの地が深川には多くあります。時代の変遷や観客のニーズと共に自分の芸を磨き、名を残した役者たちのゆかりの地をぜひ訪れてみてください。

（主な参考文献）

津田類『江戸の役者たち』（ぺりかん社 /1987）
織田紘二『淡交ムック　歌舞伎　家・人・芸』（淡交社 /2005）
野島寿三郎『新訂増補　歌舞伎人名事典』（日外アソシエーツ株式会社 /2002）